

編集員(チバ アキオ)

編集後記

編集長(ダン シロウ)

★ 第7巻第三号(通巻27号)をお届けする。今号から又、新しい執筆者が加わって下さった。臼井正樹さんと山下桂永子さん。中味はじっくり味わってください。そして一年ぶりに、野良猫、じゃなくて、この世界を自由に行き来する社会猫が戻ってきた。もう一本、三野さんの「遍照金剛」も再開した。高垣さんの連載は新たなテーマになってスタートする。河岸さんの復活モノもある。

★ うっかりというか、油断だが、執筆者の皆さんに今号執筆の締切お知らせをするのを忘れていた。通常は締め切り月の初めにメールを差し上げていたのに。

だが振り返ってみると、忘れていたと書くのは正確ではない。そのつもりでPCを開いた記憶がある。そこで何か他の緊急用件が目に入ったのだと思う。その対応をしている内にすっかり忘れてしまったのだ。こんな事態を二度、繰り返した。

こういうことが最近よくある。老化現象だ。そしてある執筆者からの指摘で慌てて11月20日過ぎに締切告知メールをコピペ修正で送ったら、前号の締め切り告知で書いた接頭文「暑い夏がまだまだ続きます……」をそのまま残してしまうポカ。まったく、よくこれで定期刊行出来ているものだが、それもこれも几帳面な執筆陣のおかげだ。

なんて、こう書いておけば、引きつづき誠実に対応してくださるだろうと、押しつけているだけか？ 策略が見え見えだな。

★ でもとにかく、今号もなかなかの充実ぶりである。更に次号から新規執筆者も今のところ二名、予定している。とっくに全部読んでいる人は限られた状況になっている。文藝春秋と同じだ！ なんて大きく出たよ。

「対マガ」はこの時代の現在進行形の資料である。過去の資料庫ではなく、今を映し出す対人援助世界の記録誌になれたらいい。

「あきおちゃん！」、祖母のお葬式の最後、参列して下さった方々を会場の出口で見送っている時に声をかけられた。その方は秋田の実家の数軒隣にあった、パンとお菓子などを売るお店のおばちゃん！ お目にかかったのは30年ぶりぐらい！ 生まれて1年で秋田の実家を離れ、多くの時間を大阪で過ごした私には秋田は夏休みに過ごすところ。おやつの時間になるとアイスを買いに、お菓子を買いにことそのおばちゃんのお店に行った。44歳の今、私を「あきおちゃん」と呼ぶ方はいない。秋田、東京、仙台、大阪と移り住んだ私には、小さい「あきおちゃん」を知っていて、現在も出会う方は親戚のごくわずかの方々。地域の方で当時の私を覚え、今も声をかけてくれる経験は皆無に等しい。そう、私はあの秋田に確かに生きていた！ …それが前号26号の対人援助学マガジン編集会議を欠席し、私が経験したこと。

人生の縦軸か横軸か奥行の話なのかわからないけど、自分自身の人生をとらえるときの何かが広がった経験だった。

編集員(オオタニ タカシ)

いつも、編集後記を書く前に「さて、何を書いたものか……」と思索する。時にはちょっと途方に暮れる。一応、編集員ではあるのだが、あまり“編集をしている！”という意識がないからだ。執筆者の皆さんから届いた原稿を、体裁を整えて、Webにupできるよう手配する。体裁まで独自に整えておられる方もいるので、それほど膨大な仕事量にはならない。むしろ、最初の読者として楽しく読ませてもらっているというのが実感である。

ただ、時折だが「マガジン」という場や仕組みの持つ力に思いを巡らせることがあり、それがマガジン全体のことを考える、唯一の編集員らしい思考といえるのかもしれない。私自身、機会に恵まれて現在の職場以外でも色々な場で仕事をさせてもらっている。いずれの場でも感じるのは、組織の縦横の構造が健全に機能していることはそうそうないということ、さらに時間軸が入る世代交代や経験や知識の伝承という側面になると、もはや何の手も打たれていないのも珍し

くないということである。それを妨げているのは、システムの問題であったり、個人の感情の問題であったり、立場や考え方の相違であったりする。それを解き解すのは簡単ではないし、そういうしがらみとうまく付き合うのが大人だと言われるかもしれない。それは承知していて、その上でやはり健全に機能しているものに触れておくことや機能している背景にあるものに思いを巡らせておくことが、自分自身がしがらみに絡め捕られてしまわないために大切であると思っている。私にとって、マガジンについて考える機会は、そういう時間になっている。

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は
danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町438
ランプラス二条御幸町402 仕事場D・A・N

対人援助学マガジン

通巻27号

第7巻 第三号

2016年12月15日発行

<http://humanservices.jp/>

第28号は2017年03月15日
発刊の予定です。
原稿締切2017年2月25日！

常に新規執筆者を求めていますし、お誘いすることもありますが、執筆依頼はしていません。

自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分の専門分野の今日記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。

連載誌ですが必ず何回以上と決めているわけではありません。必要な回数(ずっと・・・というのもあります)。多くの方達が

連載7年目を迎えています)を、書いていただけるよう設定します。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。

執筆資格は学会員であること。したがって書いていただく方には、対人援助学会への入会をお願いします。まだ登録していない、対人援助領域からの積極的参加を求めます。

対人援助学会事務局

〒603-5877 京都市北区等持院北町56-1
立命館大学大学院応用人間科学研究科内
TEL:075-465-8375 FAX:075-465-8364

対人援助学会事務担当

入会・退会・変更届

〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1
リファレンス内
TEL/FAX 学会専用:06-6910-0103

表紙の言葉

寅さんである。いつ見始めたのかは覚えていない。もともとの連続TVドラマを見ていた。そして映画になって、初期は必ず見た。

やがて公開が年中行事になり、話題になったときだけ。そして、そのうち見なくなった。渥美清さんが亡くなった頃に又、数本見たような気がするが、何を見て、何は見えていないのかは、ゴルゴ13に似て、もはやわからない。

寅さんより渥美清という役者の方に関心が強い。更に、本名を田所さんと言ったと思うが、ほぼ寅さんで、渥美さんでの一生だったのだろう。

二つもの大きな名前を持ちながら、自分自身を生きるのは、どんなだったのだろうとたまに思う。

2016/12/25 団士郎